

時間経過がわかるリアルな観察記録 「宝永四年富士山噴火絵図」

今をさかのぼる300年ほど前の西暦1707年、旧暦で宝永四年と呼ばれたこの年の暮れに、富士山で大規模な噴火が起きた。「宝永の大噴火」あるいは「宝永噴火」と呼ばれる有名な噴火であり、山麓の村々はもとより、当時の江戸の街にまで火山灰が降り注いだ激しい噴火だった。この噴火を最後として富士山は長い眠りの時代に入り、その後現在まで確かな噴火を起こした証拠は知られていない。

宝永噴火が、どのような規模や性格をもった噴火であったか、当時の社会にどのような影響を及ぼしたかは、かなり細かな部分まで明らかにされつつある。また、そのような作業によって、富士山が将来起こすであろう噴火に対する準備や対策を考える手がかりが得られる。実際に、富士山ハザードマップ検討委員会が実施した富士山噴火の被害想定（内閣府のホームページ等で公表済み）は、宝永噴火の噴火推移や被害のデータにもとづいたものとなっている。

図1～図3は、東海道の宿場町であった原（現在の静岡県沼津市原、JR東海道本線の原駅の近く）で代々書役（役場の記録係）をつとめていた土屋家所蔵の3枚組の絵図であり、南側から見た宝永噴火の情景がみごとに描かれている。1枚目が昼の情景、2枚目が夜の情景、3枚目が焼け納まり（噴火直後）の情景との説明書きがある。

昼の情景を見ると、富士山の南東斜面の五合目付近から恐ろしい形をした噴煙が立ち上っている。右上の説明書きには「宝永四年十一月二十三日の午の上刻（午前十一時ころ）に地震があり、富士山が雷のようになって、この絵のように焼け出た。十二月八日まで十六日間にわたって焼けた」と書かれている。

夜の情景では、噴煙の代わりに火口から立ち上る火柱が描かれている。当然噴煙も出ていたはずだが、夜間であるために火口直上の高温部分にあたる赤熱した火柱が姿をあらわしたのである。右下の説明書きには「焼け始めた十一月二十三日から、十二月八日の夜まで毎夜このように見えた。ただし、二十三日の焼け始めの夜

はとくに火柱が大きく、家の戸板や羽目板などが音をたてて震動した。翌日の七つ時（薄明の少し前）には、焼け灰がただ一度だけ降った」と書かれている。また、その上には「毎夜、稲光のように伊豆の天城山のあたりまで光渡った」とも書かれている。

現代火山学の知識に照らせば、戸板を鳴らした震動は普通の地震ではなく、爆発的噴火にもなう空気振動（空振）と解釈される。毎晩光った稲光は、噴煙の中の激しいガスの動きが火山灰粒子を帯電させて発生する火山雷と考えられる。

焼け納まりの情景には、現在も富士山南東斜面の六合目付近にある宝永火口と宝永山が、はっきりと描かれている。宝永噴火が宝永火口から生じたものであることは、この絵図から一目瞭然である。絵の説明書きには「十六日間焼けて十二月九日の朝の七つ時頃（午前四時頃）、大きくひとつ鳴った。九日は山が晴れ渡り、宝永山がこのようにできていた」と書かれている。どうやら、十二月九日（新暦で1708年1月1日）の未明にドカンと鳴ったのを最後に、宝永噴火のすべてが終了したようである。噴火前には存在しなかった宝永山が、噴火によってできたこともわかる。

宝永噴火を描いた絵図は、この三枚組の他にもいくつか知られているが、これほど美しく、かつ噴火期間中の情報に富んだものは知られていない。とくに、同じ場所からの時間経過がわかる絵図としては唯一のものである。形・色彩の描写もリアルであり、明らかに噴火の目撃者自身が描いたものと考えられる。

今見る美しい富士山の姿から、噴火災害をリアルに思い描くことは専門家であってもなかなか難しい面がある。富士山がいずれは噴火する山だということを一般市民に想像・実感してもらうための、なくてはならない教材のひとつである。

小山真人
（こやま・まさと 静岡大学教育学部教授）



図1 昼の情景

昼乃景気(図1)
 宝永四年丁亥十一月二十三日
 午の上刻ニ
 地震ユリ
 富士山雷乃如クナリ
 焼出ルコト如斯 右二十三日より
 十二月八日迄十六日之間焼候
 昼之体如此
 此所江焼雲の内より石砂下ルこと
 大星の如シ 積りて宝永山と成ル
 但し十一月二十三日ニ斗り見ル

夜乃景気(図2)
 焼初十二月二十三日より
 十二月八日ノ夜迄
 毎夜丹 如此 見候
 但シ二十三日焼初之夜
 別而大キ丹
 常所 人家之戸 者めをなら須に
 同ク明テ七ツ時ニ
 当宿へ焼灰降
 事 唯志度ナリ
 毎夜稲光りのことく
 伊豆阿末木山辺迄光り
 渡る事 如此

焼納り乃景気(図3)
 右十六日之間焼ケ
 十二月九日之朝
 明テ七ツ時之頃
 大キ耳 志ツ鳴ル
 九日尔者
 山晴渡り見る事如此
 宝永山出来ル



図2 夜の情景



図3 焼け納まりの情景